

# 待兼山俳句会

第六百七十八回

世話人 山田安廣・鈴木輝子・寺岡 翠・根来眞知子  
東中 亂・向井邦夫・森 茉衣

令和五年九月十一日（月）

会場

大阪俱楽部 会議室

締切 午後二時

出席者

山戸暁子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・寺岡 翠・東中 亂・東野太美子・向井邦夫  
森 茉衣・山田安廣

投句者

瀬戸幹三・上田恵子・植田真理・碓井遊子・草壁 昇・鶴岡言成・中嶋朱美・中村和江  
西川盛雄・根来眞知子・平井瑛三 出席者十名+投句者十一名 計 二十二名

兼題

鬼灯・鉢叩（幹三） 秋の夜・秋草（暁子）

当季雜詠 通じて八句

次回

例会 令和五年十月十六日（第三月曜日） 会場

大阪俱楽部 会議室

締切 午後二時

次々回

兼題 秋澄む・渡り鳥（幹三） 新松子・秋祭（暁子）

その他当季雜詠

吟行 令和五年十月二十九日（日）吟行地 神戸市住吉川両岸と海岸地域

（配布済み別紙参照）

選者吟

沖へ出す小舟の欲しき秋の夜

ほほづきや今も少女の目のままで

近づかず遠のきもせず鉢叩

わが望み秋草棺に溢るるほど

秋草に自転車倒し吾も横に

秋の夜余生といふも長々と

幹三

暁子

幹 三選 (後選)

- ◎秋草に自転車倒し吾も横に  
ぼつりぼつり話深まる夜半の秋  
鉢叩き見えざるもの声すなり  
鬼灯や少女の頃も辛かりき  
花消えて葉の逞しき秋の草  
一人酒たのしむことも秋の夜  
鬼灯や遠き昔の母の友  
ほおづきを上手に鳴らす友がいた
- ◎城跡や身の丈ほどの秋の草  
鬼灯の赤に華やぐ祝ひ膳  
釣人の径薄々と秋の草  
竹籠に秋草挿して風を呼ぶ  
◎鬼灯を鳴らす少女が先頭に  
◎鉢叩き耳のありがたき  
犬のごと無垢に眠れる秋夜かな  
◎秋草の手早く束ね活けらるる  
友見舞うて言葉少なし秋の夜  
耳聴き夫ひとりじめ鉢叩  
◎一打一打と静寂深めて鉢叩

|     |    |    |    |
|-----|----|----|----|
| 眞理  | 朱美 | 邦夫 | 暁子 |
| 安廣  | 邦夫 | 暁子 | 暁子 |
| 兵十郎 | 瑛三 | 暁子 | 暁子 |
| 堯子  |    | 暁子 | 暁子 |
| 昴   |    | 暁子 | 暁子 |
| 太美子 |    | 暁子 | 暁子 |
| 真理  |    | 暁子 | 暁子 |
| 邦夫  |    | 暁子 | 暁子 |
| 安廣  |    | 暁子 | 暁子 |
| 太美子 |    | 暁子 | 暁子 |

幹三特選句講評

- ・秋草に自転車倒し吾も横に  
さぞかし気の晴れたことでしょう。草の香り、ひんやりとした感触、そして何よりも秋空が高く広い！
- ・城跡や身の丈ほどの秋の草  
「や」の切れが効いています。また、動詞が無いといいうのもいい形です。冷静な写生、全てを言わない、そのことが読者の胸にとどきます。
- ・鬼灯を鳴らす少女が先頭に  
読者それぞれが景を楽しめる句です。ノスタルジックなビジュアルに、ほほづきの音が加わります。

・鉢叩きへし耳のありがたき

太美子

感謝があるのがこの句の素敵なところです。「聴力検査」がかかるらしい鉢叩きであるというのも微笑ましい。老いまたことを嘆く句、余生を吟ずる句にはほつとさせられました。手を出しませんが、この句にはほつとさせられました。

・秋草の手早く束ね活けらるる

邦夫

秋草を活けてまるで野の景のようだ、という句はよく見ます。しかしこの句は活ける前の行為を述べて、それが実に秋草らしい。野の景のように活けられたといふこともよく分かります。

・一打一打と静寂深めて鉢叩

太美子

こんな感じですよね。ひと叩きごとに沈み込んでいくようなイメージがあります。音が続いているのに静寂を感じる、そこが眼目です。秋の心です。

・鬼灯や母娘で守る小料理屋

鬼灯や遠き昔の母の友

邦夫

ちょっとのぞいてみたくなる店ですね。上五でこの店の様子が見えます。「鬼灯や」がたいへんよく効いているという訳です。そこへ母娘・小料理と来て完成しました。

◎秋の夕瀬戸の島々空にあり  
鬼灯や器用不器用笑ひ合ひ  
○秋草に埋まる古宿追分路  
◎秋の空海と見紛ふ夕べかな  
鬼灯や仕上げに我慢足りず幕

悠然と鷺の舞ひたる豊の秋

遊子

鬼灯や仕上げに我慢足りず幕

輝子

太美子

鬼灯にフエアリーランドへ誘われ  
泥被る秋草の早立ち上がる

茉衣

秋の夕瀬戸の島々空にあり

翠

鬼灯や器用不器用笑ひ合ひ  
○秋草に埋まる古宿追分路

邦夫  
堯子  
眞知子  
和江

★選者からひとこと

この会の特徴として「擬人化」の句が多いことがあげられます。人の行為に喻えることで「発見」したと作者はお思いになるかも知れませんが、往々にして一人よがり、時には幼い句になつてしまします。擬人化は、よほどの新しさ・詩心がないと成功しません。人に喻えたことで考えを止めないで、さらに対象をよく見ていただきたいと思います。きっと作者ならではの「ことば」が見つかります。

暁子選

邦夫

堯子

眞知子

和江

無縁仏聞くや供養の鉢叩き

◎竹籠に秋草挿して風を呼ぶ

秋草を只活け今朝の仏花かな

子ら寄り来鬼灯ほぐす祖母の膝

◎沖へ出す小舟の欲しき秋の夜

アメリカで同じ満月愛でる孫  
すすき原登れば遠く瀬戸の海  
ほほづきや今も少女の目のままで

乱  
堯子

言成

輝子

幹三

幹三

茉衣

安廣

幹三

兵十郎

安廣

幹三

昂

言成

安廣

翠

・秋の空海と見紛ふ夕べかな

堯子

追分は本来街道が二つに分かれる場所を指す言葉。  
これはその元の意味で、どこかの街道の分岐点なんか、それとも信濃追分であろうか。昔は賑わつたで  
あろう街道と宿、今はさびれて人通りも少なくなつた。秋草、古宿、追分と郷愁を誘う言葉が並んだ。

・竹籠に秋草挿して風を呼ぶ

堯子

スケールの大きい、気持ちの広がるような句。海辺  
に立ち、水平線の彼方を見ているのか、或いは鰯雲  
の流れる空を海のようだと思われたのか。

・沖へ出す小舟の欲しき秋の夜

幹三

おそらく月の美しい夜だろう。海原のただなかでの  
月見に憧れる。

・秋草と呼べば詩心庭の花

言成

秋草と呼べば詩心庭の花

暁子 特選句講評

秋草は花も地味で目立たぬものが多い。ほとんど  
ただの雑草なのであるが、古人たちはこれらを秋草  
と呼んで味わい、歌を作ってきた。詩人は何でもな  
いものに詩を見つける。

和江

・秋草に埋まる古宿追分路

互選三句

朱美選

秋草に自転車倒し吾も横に  
道の駅鬼灯一枝買うてみる  
秋深し大草原に星の降る  
モンゴルの夜空、摑めそうな一面の星、昔の思い出。

瑛三選

城跡や身の丈ほどの秋の草  
秋の夜や踏切の鐘長々と  
鬼灯の赤に華やぐ祝ひ膳  
いかにも楽しく美しい句。鬼灯の赤が利いている。

和江選

テレビ消し電灯を消し鉢叩  
秋の夕瀬戸の島々空にあり  
秋の夜や子とずるずると酌み交はす  
話すでもなく分かりあえる父子の様子に打たれました。

邦夫選

秋草の強さを秘めて戦ぎをり  
秋草を活けて室内野の風情  
鉢叩あの世の扉すこし開け  
命限りに鳴く鉢叩はやがて淨土に迎えられるであろう。

恵子選

鬼灯や仕上げに我慢足りず幕  
泥被る秋草の早立ち上がる  
鬼灯や器用不器用笑ひ合い  
四十年前の妣と子供達、鬼灯の我が家の思い出です。

言成選

花消えて葉の逞しき秋の草  
鉢叩声の途切れて闇深し  
テレビ消し電灯を消し鉢叩  
鉢叩を楽しむことに集中する様子がわかる。

堯子選

一打一打と静寂深めて鉢叩  
子ら寄り来鬼灯ほぐす祖母の膝  
庭石の蔭に恋する鉢叩  
虫の音でなく居場所に注目。湿った場に「恋」が面白い。

太美子選

ほほづきや今も少女の目のままで  
秋の夜栓をひねればインクの香  
鬼灯や器用不器用笑ひ合い  
どの時代にも小さな事を笑いに変える若さがある。

幹三  
和江  
眞知子

輝子  
眞知子

暁子  
安廣

真理  
兵十郎  
安廣

堯子  
邦夫

太美子  
暁子  
輝子

太美子  
輝子  
言成

暁子  
安廣

暁子  
安廣

輝子選

友見舞うて言葉少なし秋の夜  
わが望み秋草棺に溢るるほど  
気のつけば数へてゐたり鉢叩  
鉢叩は速すぎも遅すぎもしない。つい数えてしまふ。

兵十郎選

秋草やもののふ悼む余吳の海  
声明の遠くに聞こへ鉢叩  
竹籠に秋草挿して風を呼ぶ  
秋の風のさわやかな感じが息づいてゐる。

茉衣選

秋草やもののふ悼む余吳の湖  
鉢叩あの世の扉すこし開け  
ほほづきや今も少女の目のままで  
女性の目だけの描写とほほづきの余情がすばらしい。

安廣 晓子 幹三 盛雄

眞知子選

秋の夜栓をひねればインクの香  
鉢叩あの世の扉すこし開け  
鬼灯や少女の頃も辛かりき  
少女の頃辛かつたのは何?もつと気になる「も」。

真理選

文字消えし道標埋む秋の草  
鉢叩声の途切れて闇深し  
秋の夕瀬戸の島々空にあり  
「瀬戸の島々」という形容が素晴らしいです。

盛雄選

鉢叩ゆたり楽しむ仕舞風呂  
秋の夜順番待ちの本五冊  
秋草に自転車倒し吾も横に  
私の子供時代と重なり、つい懐かしく。

和江 晓子 安廣 晓子 輝子 晓子

和江 晓子 安廣 晓子 輝子 晓子

秋草や牛乳瓶の無人駅  
鉢叩声の途切れて闇深し  
鬼灯の赤に華やぐ祝ひ膳  
料亭などで供される鬼灯は選り抜きで赤もひときわ豪華。

恵子 安廣

鬼灯を鳴らす少女が先頭に  
鉢叩チチチチチチと石の陰  
すすき原登れば遠く瀬戸の海  
高台の薄の原から見晴るかす瀬戸内の美しさが良い。

和江 晓子 安廣 晓子 輝子 晓子

安 廣 選

釣り人の道薄々と秋の草  
子ら寄り来鬼灯ほぐす祖母の膝  
鉦叩あの世の扉少し開け  
鉦叩の声はどこか読経の鈴（りん）の音を想わせる。

兵十郎  
輝子

遊 子 選

道祖神闇に鬼灯灯しをり  
秋草の手早く束ね活けらるる

和江  
邦夫

鬼灯をもみつ語れる画廊主  
商談中か鑑賞中なのか話の間が持ちそうな気配です。

恵子

乱 選

秋草に自転車倒し吾も横に  
秋草の手早く束ね活けらるる  
鬼灯の実揉み種出し吹きし日や  
一見トリセツのようだが、鬼灯で遊んだ日が蘇る。

暁子  
邦夫  
堯子  
や

参加者自選句

墓花の中に鬼灯凜として

一人酒たのしむことも秋の夜

瑛三  
朱美

鉦叩ゆたり楽しむ仕舞風呂  
堆肥をば樂土としたり鉦叩  
鬼灯と格闘せし子今は母  
庭石の蔭に恋する鉦叩  
竹籠に秋草挿して風を呼ぶ  
秋草の強さを秘めて戦ぎをり  
灯の消えて寝るには惜しき星月夜  
鬼灯の萼の秘密や毒隠す  
声明の遠くに聞こへ鉦叩  
流れゆく雲間にまみゆブルームーン  
濡れ縁でひとり鬼灯鳴らす午後  
古き歌口ずさみたり秋の暮  
泥被る秋草の早立ち上がる  
秋の夜は群読の海壇ノ浦  
鉦叩声の途切れて闇深し  
片すみに鳴く声澄むや鉦叩  
仏壇の鬼灯一つそのままに

和江  
邦夫  
恵子  
言成  
堯子  
太美子  
輝子  
兵十郎  
昇  
兵十郎  
輝子  
兵十郎  
邦夫  
恵子  
真理  
眞知子  
翠  
盛雄  
安廣  
遊子  
乱

「ひとりぶ」

山田安廣

会報の編集を外注する事について検討を重ねて来ましたが、久次米さんと仰る方が十月から引き受けくださいる事になりました。それに伴って、会員の皆様方の投句や出句、自選句の報告、選句結果の報告について、従来とは全く異なる方法を取る事になります。今までの経過や具体的な変更内容などは、改めて全員の皆様方に文書でお知らせ致しますのでよろしくお願い申し上げます。

九月十一日 選者の幹三さんが俳人協会の全国俳句大会で二人の選者から特選を得られ、特選賞を受けられました

返したる平目に貌の無かりけり 幹三

期せずしてほぼ同じ時期におめでたが重なりました。

「お知らせ」  
輝子・邦夫

★  
訂正をお願いいたします。

八月入会の上田恵子さんの住所・電話番号が間違つていきました。

住所 564-0014 吹田市吹東町 27-15  
TEL 06-6383-0315

八月二十日 選者の暁子さんが朝日新聞日曜日の俳壇で第一席に入選されました。

句と遊び米寿の秋を迎へけり

暁子